

# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子越中島保育園
施設所在地	江東区越中島2-1-30 越中島STビル4階
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

## 1. 活動のテーマ

<テーマ>

体育あそび  
「人間大好きっこ」の根っこを育む ～夢中で遊び、共感し合う心と体～

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

幼児クラスのサーキット活動にあこがれを抱く乳児クラスのおともだちへサーキット活動の楽しさを毎日楽しみたい。園庭でのびのび身体全身使って遊びたい。

## 2. 活動スケジュール

・4月 新しい担任と一緒に遊びを通して、身体を動かすことを楽しむ。幼児クラス：昨年度から親しみのある運動器具を使った朝の15分サーキットを取り入れる。子どもに何を使った遊びをしたいか聞き、子どもたちの興味がある動きや運動器具を取り入れた。(平均台、トランポリン、鉄棒)また、どんな動きがしたいか保育士が問いかけるなどして、子どもたちの「やりたい」「楽しそう」を引き出していった。2歳児クラスが幼児のサーキットを見学し、幼児と一緒に合同でサーキットに参加することを計画。昨年度、年長児クラスがやっていた縄跳びに挑戦し、縄跳びに挑戦する児が増えた。(縄跳びや大縄を使った跳び方を練習中)

・5月 異年齢交流活動(2歳・5歳児)を開始。散歩先に手つなぎをしていくことに慣れてきたので、年長児との手つなぎサーキットを開始。幼児クラスは午後サーキットを取り入れ、保護者がお迎えの際に、どのような活動をしているか実際に見てもらう。

・6月 2歳児クラスは手つなぎサーキットに慣れ始め、手つなぎなしで一人でサーキットをすることに挑戦。安田式「がんばりまめ、Com」のサイトで参考にし、保育士が保育に取り入れた。「そうか!こんな動きもできるんだ」と子どもだけではなく、子どもの動きの可能性から保育士も学びや発見から活動に取り入れる。毎回講師に来ていただいた後に、活動の振り返りや質疑応答を通して、動きのポイントや保育に繋がられるアドバイスをいただき保育で実践した。1歳児クラスは、トランポリンに興味を持ち保育士と一緒に跳んだり、自ら何回も跳ねる感覚を身体全体で感じる体験をする。

・6月～11月 幼児クラスは、今年の運動会のテーマ「世界」を元に平均台(万里の長城)跳び箱(富士山)・鉄棒(パリの凱旋門)・マット運動(移動)に見立てた種目を年長児と一緒に考える。ふぁんぱりん活動で出てきた世界の料理や世界の動物・名産品のカードをめくり、世界地図に貼って完成する種目に取り組む。

・8月 幼児クラスの保育士2名が体育・運動遊び夏季研修会に参加。研修で学んだ環状線サーキットや子どもへの関わり方・環境構成等を研修報告会で職員に共有。幼児クラスと一緒にクラス事に実施。3歳児クラスが戸惑っていたものの、年中・年長児と一緒にやってみることで「できた」という喜びがさらに強くなり、運動会への期待感を高める。

・9月 1歳児クラスも幼児のサーキットに参加。1歳児クラスもサーキットに慣れ、クラスの保育でも取り入れ周遊することが少しずつできるようになってきた。

9月20日 安田式体育あそびを行う中で子どもたちが一番生き生きしている姿、積極的に楽しむ姿を保護者へも見てもらおうと考え、運動会で披露。

・11月11日 実際に保護者が保育参加で体育あそびに参加してもらい内容や使用している運動器具に触れ、実践してもらった。

・1月16日、今後の活動の発展方法について学ぶため、安田式実践公開研修会に2名参加。1歳児～5歳児の実践内容を見ながら「子ども同士の共感から伝承」についてを学び、自園では1歳児と2歳児クラス、2歳児と3歳児クラス、3歳児と1歳児クラスのスケジュールを組み込んで合同サーキットを実施。又27日講師訪問の際も「伝承」をテーマに活動内容を相談し、異年齢交流を通して、進級に向けて気持ち高めることができた。年長児がやっている縄跳びを見て「やってみたい」と発言があり、体育遊び時に取り入れた。講師から子どもたちがポップステップジャンプと段階を踏んで挑戦することができるような、「伝承」の保育への取り組み方を学んだ。

・2月4日 幼児クラスがやっているサーキットを2歳児クラスも「もっと一緒にやりたい」という発言を経て、2歳児クラス朝のサーキット活動を開始。

・2月27日 天神せんべい大木屋にて手焼きせんべい焼き体験を実施。米で作られたせんべい生地を焼いて、醤油を塗る。出来たてのせんべいはその場で試食する。

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

<p>① 運動遊具 (挑戦と達成の素材)</p> <p>鉄棒 (3色/各高さ) : 子どもが自分の高さに合わせて自ら選択できるよう配置。</p> <p>平均台 (多色・多形状) : 集中力を養うため、色によるリズムの変化や坂道 (マット併用) を設置。</p> <p>トランポリン・ボール: 感覚統合を促し、ジャンプや蹴る動作への興味を引き出す。</p> <p>縄跳び・大縄: 年長児への憧れを形にするための挑戦ツール。</p> <p>② 安全・動線構成素材 (探究を支える環境)</p> <p>衝撃吸収マット: 高い場所からの着地や回転運動への不安を取り除き、挑戦を後押しできるようにする。</p> <p>マーカー・コーン・縄: 全力疾走の指標や、瞬時の判断 (敏捷性) を促すコース設計に使用。</p> <p>回遊型スペース: 衝突の不安なく、何度も「トライ&amp;エラー」を繰り返せるよう、柵を移動させ広い動線を確保。</p> <p>③ 知的・教育リソース</p> <p>専門講師による指導: 保育者の声掛けや介助法の統一、動きのポイントの習得。</p> <p>「がんばりまめ.com」の登録: 動画を通じた職員間のイメージ共有と導入案の策定。</p>
--

### 4. 探究活動の実践

<活動の内容>

<p>① 4月の開始時から、幼児クラスでは「何を使った遊びをしたいか」をヒアリングし、平均台、トランポリン、鉄棒などの運動器具を子どもの興味に合わせて配置。</p> <p>② 「世界」をテーマにした想像力の拡張: 6月から11月にかけて、運動会のテーマである「世界」を運動遊びに融合させました。平均台を「万里の長城」、跳び箱を「富士山」、鉄棒を「パリの凱旋門」に見立てるなど、身体活動にストーリー性を加えることで、子どもたちの意欲をさらに引き出す。</p> <p>③ 発達段階に応じた設定:</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・乳児 (1・2歳児) : 1歳児はマットやトランポリンで「跳ねる」「進む」といった身体感覚を楽しみ、2歳児は5歳児との「手つなぎサーキット」から始め、徐々に「一人で挑戦する」段階へと移行。</li><li>・幼児 (3~5歳児) : 3歳児は色分けされた器具で視覚的に楽しみながら、5歳児はマーカーやコーンを用いた複雑な動線での敏捷性訓練や、サッカーなど、より高度な操作と判断を伴う活動へと深化。</li></ul> <p>④ 外部学習の活用と専門性の向上: 安田式「がんばりまめ.com」の活用や講師派遣を通じ、保育者は「ポップ・ステップ・ジャンプ」といった段階的な挑戦の導き方を学び、日々の保育や運動会での項目にも反映。実践公開研修会で学んだ「共感から伝承」についてを考え異年齢での活動を増やした。</p> <p>⑤ 保護者への発信と共有: 午後のサーキット活動の公開や、保護者参加型の体育遊びを実施し、子どもたちが試行錯誤するプロセス (ドキュメンテーション) を共有。</p> <p>⑥ 環境の再構築: 子ども「もっとやりたい」という探究心を途切れさせず、主体性を引き出すために、日々の生活スケジュールの中に以下の時間を再検討し再構築。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・幼児クラス (夕方のサーキットタイム) :</li></ul> <p>活動を取り入れた当初は朝の時間帯であったが、日中の活動の余韻を活かし、午後の時間を「運動遊び」の探究に充てる環境を整えた。この夕方の定例化により、保護者がお迎えの際に子どもの生き生きとした挑戦を直接見守ることができ、園と家庭で成長を共有する貴重な機会となっている。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・2歳児クラス (朝のサーキット活動) :</li></ul> <p>幼児への強い憧れから生まれた「自分たちもやりたい」という意欲を尊重し、登園直後のエネルギー溢れる朝の時間にサーキット活動を導入。この環境設定により、一日の始まりから子どもたちが自発的に活動へ入り込む流れができています。</p> <p>これらの活動を「毎日、短時間、繰り返し」行うことで、子どもたちの「やりたい!」という気持ちが常に持続し、翌日の活動へスムーズに繋がる探究のサイクルが確立されるようになった。</p>
---

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

<p>活動を繰り返す中で、子どもたちの中で「憧れ」と「教え合い」の連鎖が生まれ、探究の質が向上していく様子が見られました。2歳児が幼児のサーキットを見て「もっとやりたい!」と発言したり、年長児の縄跳びを見て下の学年が挑戦し始めたりするなど、異年齢の存在が強力な動機付けとなりました。年長児が3歳児に寄り添い「一緒にやってみよう」と声をかける姿も日常的になりました。</p> <p>「何回やってもいいよ」という保育者の見守りにより、失敗を恐れず「どうやったらできるかな?」と自分なりに身体の使い方を調整する姿が見られました。「今日はサーキットしないの?」「次はもっと難しいのに挑戦したい!」といった主体的な発言が増え、自分たちで遊びをアレンジする提案も生まれました。</p> <p>狭い空間でのサーキットを通じ、子ども同士で「ぶつかったら謝る」「順番を待つ」といった危機回避やルール遵守が自然と身に付きました。また、自分でできた喜びを表情や言葉で全身で表現し、自信に満ちた姿が見られるようになりました。</p> <p>保育者は「足を上げて」といった技術指導を控え、「がんばってるね!」といった肯定的な声掛けや、情緒的な絆を育む「ハイタッチ」を重視するよう変化しました。これにより、子どもたちは保育者に認められている安心感の中で、より自由に探究を深めることができました。</p>
---



## 5. 振り返り

### <振り返りによって得た先生の気づき>

#### ・制限から「信頼」への転換

以前は怪我を恐れて「危ない」と制限をかけがちでしたが、適切な環境設定（マットの配置や動線設計）さえあれば、子どもたちは自ら空間を認知し、危険を回避する力を備えていることを再確認することができた。

#### ・がんばりまめ.comや研修、講師の助言による「指導」から「やる気を引き出す伴走」への意識転換

安田式の「応答的な関わり」を学んだことで、子どもの意欲を認める声掛けに徹することで、技術を教える「指導」に陥らず、子どもがトライする過程を前向きに捉えて褒める、短時間の活動を毎日繰り返すことが、持続的なやる気を生む最大の要因であることを実感した。

#### ・過程から考える保育の役割

結果（できたかどうか）ではなく、そこに至るまでの「どうすればいいかな？」と考える過程を大切にすることが、子どもたちの主体性を守る保育者の本来の役割であると改めて認識した。

又、朝の短時間の運動が脳を活性化させ、その後の集中力や生活リズム（食欲・睡眠）の改善に繋がるという理論を実践を通して実感することができた。

#### ・家庭・地域との共有による価値の創造

ドキュメンテーションや運動会を通じて活動の目的を共有したことで、保護者から「身体の使い方の成長に感動した」という声をいただくなど、園の取り組みへの深い理解と信頼を得ることができた。